

先達との出合..賜った恩恵

山城7回 松尾 稔

八月下旬、記念誌編集者の高林藤樹さんから、突然（と）自身書かれている）手紙がきて、原稿依頼を受けた。

高林さんは、「山城高校第五回卒業」と書いておられるので、第七回（昭和三十）卒業の私より、年次は二年先輩だが、年齢はもうすこし上の大先輩なのかもしれない。誠に失礼な話したが、私にはこの先輩についての定かな記憶が蘇らない。これは、高林さんの方も、「貴台のことはうすうすは存じ上げておりましたが・・・」と書かれているから、お相手である。しかし、一方、高林さんは、鮮明な記憶として、「京大山城会」の名で新入生歓迎パーティーを開いた時、私が「同席のK君のことを「風の又三郎」と呼んで、自らも「山岳部」を名乗った」とのこと。その上で、「内容も分量も自由だが、願わくば山岳部につながるものを書かれたし」と。

そうです。私は、工学部卒というより、「京大山岳部卒」と言った方が、似つかわしいかもしれぬと、常々思っている。当

時の山日記を見ると、一年の五分の一ほど、多い年には、四分の一ほど山に行っている。学部卒業後は、京都大学学士山岳会（AACK）に所属し、大学院の頃は、現役（学部）の人たちとよく山行を共にした。三十二、三才の京大助教授の頃には、京都大学学術調査隊々長としてブータンまで出かけている。ただし、こんなことは、山岳部や山岳会の人たちからみれば当たり前前、あるいは、当たり前以下のことであって、自慢にも何にもならない。

ただ、私が今、自分の歩んできたこれまでの人生を振り返って明言できることは “もつと良いみちがあつたかも知れぬが、少なくとも私本人は、これ以上のみちは望むべくもなかった” と思っていることである。山岳部・山岳会での経験——自己の努力というよりも、教えられた多くのこと——が、私自身の人生観や職業選択、何度か直面した修羅場での意思決定と実行動に、決定的な影響を与えたと実感しているからである。ここでは、実際の「山行」から、肉体的、精神的に自分自身で学びとったことはさておき、主として山岳部、山岳会の多くの先輩方から教わったこと、というより、賜った恩恵について書きたい。とは言え、それらは余りにも多すぎるので、誰もがご存じの、一時代を画した三人の大家の名だけを挙げ、しかもそれぞれの方からいただいた恩恵の一つ、二つだけについて書いておきた

い。

今西錦司・西堀榮三郎・桑原武夫先生である。三人の先生方は、その生年が一年ずつ違うが、京都大学のいわゆる同期生だ。私自身の感覚は、初めて先生方の顔を見て、声を聞いた時以来、亡くなるまで、全く不変だったが、特に若いときは、遠くから見上げるばかりの巨人たちだった。

大学、特に旧設の総合大学（要するに旧帝大）の大きな欠陥の一つが、学部や学科別の縦割り関係、そして専門領域の過度の細分化であり、好むと好まざるとに拘わらず、そういう環境の中で生きている大学人たちである。最近はいぶ改善されたが、二、三十年前までは、特にひどかった。そういう中で、ひとときわ、特異な光を放っていたのが、京都大学人文科学研究所だった。そこでは、各自が自己の専門を持ちながら、専門領域を超えた研究や議論が通常的に行われていた。上に挙げた先生方は（西堀先生は研究所に籍を置かれたことはないが）、当時の人文研が醸し出す雰囲気と実行力をお持ちであった。

私がAACKの最も若い理事の頃——私、二十九か三十才ぐらいであり、三先生は六十一、二才だった——広い日本座敷で行われていた理事会で、梅棹忠夫、川喜多二郎、中尾佐助先生などが「コの字型」に居並ぶ中、三先生は、常に正面の真ん中に座して、議事を進められた。（三高、京大の学生の頃からも

そうであったと聞いたが）常に今西先生がリーダー、西堀先生がサブリーダー、桑原先生が（今で言うところの）コーディネーターと見受けた。これは、公式の場のことだが、お酒の入った私的な場でも同じように見受けた。

学問の話から、山の話、ヒマラヤ遠征の話、人生にまつわる諸々の話、総て文系、理系、などという狭い話ではなかった。こんなことを書いていたら、紙幅がいくらあっても足りない、先を急ぎましょう。

大変困難な作業だが、三人の先生方から、私自身が勝手に学んだことを、それもわずか一つに限り挙げておきたい。

今西錦司先生・折りに触れリーダーシップ（リーダーたる必要条件）について話されるのを聞いた。先生晩年の著書、「自然学のすすめ」にもあったように思うし、また、私が聞いた時には、その折々で順序や言い回しが違ったが、要するに、次の三点のことを常に言われた。

リーダーの備えるべき最低限の要件として、①人間的魅力（人格・人柄）、②先見性・洞察力。ここまではリーダーシップ論を述べたり、書いたりしているおおかたの方々が挙げておられることだが、先生は、③番目に「常に責任をとる覚悟が来ていること」を挙げられた。そして、①、②は「たぶん」に持つて生まれた資質だが、③には「人生を通してのトレーニング

グが必要であること”また、“責任のとり方は自分自身で考え実行出来ること”を強調された。先生の背中に近づくなど及ぶべくもないことではあるが、その背は、見失わぬようにする努力目標であつたし、今も変わらない。

西堀榮三郎先生…自由な人生選択を地でいかれた先生にも、キーワーズを挙げるだけでも枚挙にいとまがないほど、多くの教えを受けた。中でも、「科学と技術」・「自然」の捉え方やそれら相互間の関係については何度もお話しを聞く機会があり、私の人生哲学に決定的な影響を与えた。先生は、自らが自然科学者であり、技術者であり、そして自然を愛する登山家、探検家でもあられたから、この課題にはご自分でも相当に悩んでおられるように見受けた。私ごとき若造の生意気な議論にも真剣に耳を傾けて下さった。“技術には社会的目的がある、目的には善悪があるから、技術には功罪がある”に集約される、幅広く、奥深い、多くの周辺諸問題についての、先生のお考えは、今振り返っても色褪せることのない、非常に高度な議論だったと思う。

桑原武夫先生…文化勲章受章の翌年、昭和六十三年四月十日先生が亡くなられた時、いろんな評の中に“…精神主義を著しく嫌悪した一代の行動的合理主義者は逝った。”“というのがあった。専門領域を超えた、いわゆる「京大人文研方

式の共同研究体制」を発明・確立された、卓越したオルガナイザー、根っからの合理主義者とお見受けした。併せて、その学問・知識の広さ、社会的影響力の大きさ、交友（遊）関係の多様さ等々、「真の文化人」の名に相応しい巨人であった。

縁あって先生は、私が隊長を務めた京都大学ブータン学術調査隊（一九六九年）の総裁に就かれた関係で、（理由は省略するが）灼熱のインドで、ほとんど二人だけで、一ヶ月に近い生活を送り、毎日お話しを聞く幸運に恵まれた。この意味で、（その他の機会も含め）、ここに挙げた三人の先生方の中で、私が最も長時間、そのお人柄に接した先生であった。教えていただいたことは余りにも多いし、先生に連なる巨大な人脈の中でこそ受け得た恩恵も書き出せばキリがない。約束通り一つだけ書いておく。「マツオ、君の学問分野に歴史はあるか？ 歴史に学ばぬ分野は必ず廃る」。三十三才でブータン・インドから帰国後、直ちに土木学会に提唱した。いまや、「土木史」は土木の一学問分野として定着した。

いづれにしても、これらの巨人たちに直接お会いし、多くの話を聞くことができたこと、また、先生方に続く素晴らしい先輩方に接する機会を得たことは、誠に幸運であった。例えば、梅棹忠夫先生、「文明論」の中で「システムの概念」に関し、

当時工学者が常識と考えていたことについて、根幹に係わる「常識の弱点」を指摘され、正に「目からウロコ」の強烈な示唆を受けた。三十七、八才の頃であった。

私のことを指してある人たちが、「京大山岳部卒業」と言い、また私自身もそれが相応しいと思う所以である。

（財）科学技術交流財団理事長・前名古屋大学総長



山城 11 回 伊藤信子